

研究課題：WEB版がんよろず相談システムの構築と活用に関する研究

課題番号：H19-がん臨床-一般-005

研究代表者：(所属施設) 静岡県立静岡がんセンター 総長
：(氏名) 山口 建

1. 本年度の研究成果

- 1) 全国の医療相談担当者、研究者、患者団体などの意見に基づき、提供する情報をさらに充実させ、並べ方についても工夫したWEB版がんよろず相談(<http://cancerqa.scchr.jp/start.php>)のリニューアル版は、多くの利用者が目的とする情報に容易に到達することを可能とした。この結果、利用者は毎月2~3万件程度とリニューアル前の10倍まで増加し、リピータの数も5倍程度となった。
- 2) アクセス対象を分析すると、がん患者の悩み・負担についての閲覧が3/4を占め、WEB上で公開している冊子や各市町の医療福祉サービス窓口の閲覧がそれに次いだ。
- 3) 約17万件のアクセスについて、静岡分類に基づく悩み・負担を分析すると、“症状・副作用・後遺症”に関するものが約半数を占め、“診断・治療”、“不安など心の問題”がそれに次いだ。同じ分類で、アンケート調査2万7千件、対面・電話によるがんよろず相談5万6千件と比較すると、そのパターンには大きな差異が認められた。
- 4) さらなる改良については、対面・電話によるがんよろず相談の記録から悩み・負担を抽出しWEB版がんよろず相談に掲載し、個々の悩み・負担への助言において、サイト内外の情報をセットで提供する工夫を進めた。
- 5) 患者・家族への情報提供用冊子である“学びの広場”について、“緩和ケアとは”、“痛みをやわらげる方法”、“患者・家族のコミュニケーション”、“がんと上手につきあう方法”の4種を作成し、1万4千部を全国の拠点病院などに配布し、WEB版がんよろず相談にも掲載した。また、がんよろず相談Q&A第5集として“乳がん編②”を作成した。
- 6) 全国の拠点病院相談支援センター担当者や患者会・患者支援団体などを対象に、WEB版がんよろず相談の利用法を説明する機会を持った。

2. 前年までの研究成果

- 1) がん患者や家族を対象に、医療情報、心のケア、暮らしの支援などに関する情報提供を目的としたウェブサイトとしてWEB版がんよろず相談を開設した。
- 2) その内容としては、がん患者・家族の悩み・負担とその解決に向けての助言、“がんよろず相談Q&A集”と“学びの広場”、“地域のがん診療機能と静岡県の市町が実施する医療福祉サービスの窓口リストなどが含まれる。
- 3) がん患者の悩み・負担の分類法として“静岡分類”を作成し、WEB版がんよろず相談へのアクセス対象を、全国調査“がん体験者の悩みや負担等に関する実態調査”で収集された2万7千件、対面・電話による静岡がんセンターがんよろず相談記録5万6千件と比較することを可能とした。
- 4) 全国のがん診療連携拠点病院相談支援センターの担当者250名が参加するフォーラムを開催し、ロールプレイにより事例検討を行い、そこでのWEB版がんよろず相談の活用方法を指導した。

3. 研究成果の意義及び今後の発展性

- 1) WEB版がんよろず相談は、我が国はもちろん世界的に見ても例がない、がん患者や家族の悩みや負担に関するウェブサイトである。がん患者や家族には高齢者が多く、ウェブサイトの取り扱いに慣れていないことから、できるだけ使いやすいシステムへの改善を図りつつある。
- 2) その活用方法としては、①医療従事者や行政担当者が、がん患者の悩み・負担の全体像を把握する、②患者自身や家族が、同じ悩みを持った数多くのがん患者の存在を知ることによって孤独感を癒し、一部作成済みの助言を活用して、問題解決を図る、③一般社会が、がん患者らの悩み・負担の実態を知る、等がある。
- 3) がん患者や家族への情報提供は、WEB版がんよろず相談とともに、冊子の提供も継続して行う必要があり、その内容をWEB版がんよろず相談に掲載してゆく。
- 4) がん患者の暮らし、とくに“抗がん剤・放射線治療と食事のくふう”を掲載する“SURVIVORSHIP. JP(<http://survivorship.jp/>)”など、他のウェブサイトとの協働を図り、シームレスな情報提供を実践する。
- 5) WEB版がんよろず相談を活用することで、がん診療連携拠点病院相談支援センターにおける医療相談レベルの向上が図られる。

4. 倫理面への配慮

- 1) 本研究においては、情報提供手法が研究対象であり、患者あるいは一般市民に危険が及ぶ状況は想定されていない。

5. 発表論文

雑誌

外国語

1. Kobayashi K, Yamaguchi K, et al., Effects of socioeconomic factors and cancer survivors' worries on their quality of life (QOL) in Japan. *Psycho-Oncology*, 17:606-611, 2008.
2. Koinuma N, et al., Economic significance of the postoperative follow-up for colorectal cancer. 67th Annual Meeting of the Japanese Cancer Association Proceedings, 209-210, 2008.
3. Nagai H, et al., Remission induction therapy containing rituximab markedly improved the outcome of untreated mature B cell lymphoma *British J Haematol.* 148: 672-680, 2008.
4. Ohno S, et al., Challenging patient populations in breast cancer, *Asia-Pacific J. Clin. Oncol.* (in press)
5. Miyashita M, Adachi I, et al., Nurse views of the adequacy of decision making and nurse distress regarding artificial hydration for terminally ill cancer patients: a nationwide survey. *Amer. J. Hospices & Palliative Medicine*, 24:463-469, 2008.
6. Tabata N, Ohno Y, et al., Partial cancer prevalence in Japan up to 2020: Estimates based on incidence and survival data from population-based cancer registers. *Jap. J. Clin. Oncol.*, 38:146-157, 2008.
7. Numasaki H, Ohno Y, et al., Workflow analysis of medical staff in surgical wards based on time-motion study data. *Japan Hospitals*, 27:75-80, 2008.

日本語

1. 山口 建、医学は科学, 医療は物語—理想のがん医療を目指して—、臨床血液、49:215-223、2008.
2. 山口 建、がん拠点病院の現状と課題、保健医療科学、(印刷中)
3. 濃沼信夫、他、胃癌治療の医療経済、日本臨床、66:639-652、2008.
4. 濃沼信夫、他、放射線治療における患者自己負担の実態と経済的負担感を増加させる要因について、日癌治、43:268、2008.
5. 濃沼信夫、がんの医療経済、日本がん検診・診断学会誌、16:21-22、2008.
6. 濃沼信夫、尾形倫明、わが国のcost of cancer、日本医療・病院管理学会誌、45:68、2008.
7. 高木麻里、谷尾吉郎、他、骨転移を有する肺癌患者に対する集学的治療の試み、癌と化学療法、35:1783-1786、2008.
8. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第9回 患者はどのように最期を過ごしたいのか〜がん終末期医療のあり方を考える〜、エキスパートナース、24:174-175、2008.
9. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第10回 マニュアル時代の「型どおりの死」、エキスパートナース、24:182-183、2008.
10. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第11回 死の恐怖を乗り越える術、エキスパートナース、24:166-167、2008.
11. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第12回 死とは一魂は残る—、エキスパートナース、24:160-161、2008.
12. 佐々木常雄、腫瘍内科医の立場から、癌の臨床、篠原出版新社、54:247-252、2008.
13. 佐々木常雄、都道府県がん・地域がん診療連携拠点病院、がん薬物療法学、(印刷中)
14. 大野真司、他、がん診療にかかわる適切な情報取得とコミュニケーション、Medicina、45:1390-1392、2008.
15. 大野真司、他、サージカルオンコロジストのためのサイコオンコロジー、Pharma Medica、26:117-123、2008.
16. 大野真司、乳がん化学療法の現状と将来、癌の臨床、54:261-266、2008.
17. 大野真司、他、多職種から多施設へと広がる乳癌チーム医療、CANCER BOARD 乳癌、1:51-54、2008.
18. 長井吉清、他、胃癌患者に対する病名告知のあり方について-QOLからみた「仄めかし」と「病名のみ」の違いについて—、日本癌治療学会誌、43:466-466、2008.
19. 柏木雄次郎、他、がん患者の心身苦痛と緩和ケアへの理解・需要〜患者アンケートから〜、心療内科、12:73-79、2008.
20. 柏木雄次郎、疼痛緩和と緩和医療、大阪府薬雑誌、59:55-61、2008.
21. 柏木雄次郎、がんのメンタルケア〜がんの辛さと苦痛への対応〜、成人病、48:26-28、2008.
22. 安達勇、がん化学療法における緩和医療科医師の役割、ナーシング・トゥデイ、23:58-62、2008.
23. 吉川栄省、がん化学療法における精神腫瘍科医師の役割、ナーシングトゥデイ、10:48-52、2008.
24. 吉川栄省、安達勇、終末期鎮静に関する倫理と精神科医の役割について、総合病院精神医学雑誌 (印刷中)
25. 大田洋二郎、他、化学放射線療法の多角的治療戦略 口腔ケア 化学放射線療法をサポートする口腔ケアと嚥下リハビリテーション、頭頸部癌、34:93、2008.

26. 大田洋二郎、がん治療で歯科が果たす役割と地域のがん患者を支援する歯科医療連携、四国歯学会雑誌、20:265-266、2008.
27. 大田洋二郎、がん治療と口腔ケア がん治療における口腔ケアの意義と歯科の役割、歯科臨床研究、5:109-111、2008.
28. 大田洋二郎、治療の進歩 口腔ケアと嚥下性肺炎、Annual Review呼吸器、2008 : 207-212、2008.
29. 大田洋二郎、がん化学療法における口腔外科医師の役割、ナーシングトゥデイ、297:43-47、2008.
30. 大田洋二郎、口臭のメカニズムとケアの選択、がん患者と対症療法、19:34-39、2008.
31. 大田洋二郎、終末期に直面する口腔症状に対するケア、訪問看護と介護、13:892-896、2008.
32. 小池眞規子、がん医療での見立てとアセスメント、臨床心理学、8:791-797、2008.
33. 高田由香、がん患者は理学療法を必要としているのか?、理学療法ジャーナル、941-944、2008.
34. 高田由香、がん医療における医療ソーシャルワーカーの役割：医療、国立医療学会、558-565、2008.
35. 高田由香、レジデントノート 高額療養費制度について教えてください、大腸癌 FRONTIER、メディカルレビュー社、75-77、2008.
36. 大曲睦恵、がん化学療法におけるチャイルド・ライフ・スペシャリストの役割、日本看護協会出版会、23:73-78、2008.
37. 大曲睦恵、緩和医療に関わるチームメンバー第9回：チャイルドライフサポート、先端医学社、(印刷中) .
38. 大曲睦恵、大切な人を亡くすこども達との出会い、日本チャイルド・ライフ研究会、(印刷中) .

書籍

日本語

1. 山口 建、他、がんの社会学—DPC時代の次に何がくるのか? : がん医療の質に挑む DPC時代のチャレンジ、グローバルヘルス研究所 (編)、日本医学出版、東京、57-72、2008.
2. 山口 建、患者視点のがん治療を可能にするために：日本の医療を変える—「医療崩壊時代」への提言—、和田 努 (監修)、同友館、東京、225-236、2008.
3. 山口 建、他、“がんの時代”における家庭医の役割：地域で支える 患者本位の在宅緩和ケア、片山 壽 (監修)、篠原出版新社、東京、40-54、2008.
4. 山口 建、がんよろず相談 (相談支援センター) の取り組みと役割、がん医療入門、朝倉書店、東京、(印刷中)
5. 山口 建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)、緩和ケアとは? (小冊子)、2008.
6. 山口 建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)、がんと上手につきあう方法 (小冊子)、2008.
7. 山口 建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)、患者・家族のコミュニケーション (小冊子)、2008.
8. 山口 建、他 (「がんの社会学」に関する合同研究班)、痛みをやわらげる方法 (小冊子)、2008.

9. 山口 建、他（「がんの社会学」に関する合同研究班）、「がんよろず相談Q&A第5集 乳がん編②」、（印刷中）。
10. 濃沼信夫、がん診療の医療経済学、がん薬物療法学、基礎臨床研究のアップデート、日本臨床社、大阪（印刷中）。
11. 佐々木常雄、赤穂 理絵他、終章 がん患者の生と死を見つめて—二十一世紀 死生学：ここに寄り添う緩和ケア 病いと向き合う「いのち」の時間、新曜社、東京、2008。
12. 佐々木常雄、総論 がん化学療法を、どう進めるか：がん化学療法 ベスト・プラクティス、佐々木常雄（編）、照林社、東京、2008。
13. 永井宏和、ホジキンリンパ腫 Cancer Treatment Navigator、中川和彦（監修）、メディカルビュー社、206-207、2008。
14. 大野真司、他、チーム医療、これからの乳癌診療2008-2009、福田護、池田正、佐伯俊昭、鹿間直人（編）、金原出版、東京、2008。
15. 安達勇、他、緩和ケアチームの経緯と活動 静岡県立静岡がんセンター：緩和ケアチームの立ち上げ方・進め方、森田達也、木澤義之、戸谷美紀（編）、株式会社青海社、東京、14-16、2008。
16. 吉川栄省、がん医療において すみやかな対処が必要な精神症状について、がんと化学療法（印刷中）。
17. 小池真規子、終末期医療・悲嘆のプロセス、産業カウンセリング辞典、日本産業カウンセリング学会（監修）、金子書房、東京、191-192、2008。
18. 小池真規子、子どもは自分の死をどう見つめるか—死に直面した子どもたち—：子どもと思春期の精神医学、中根晃他（編）、金剛出版、東京、105-110、2008。
19. 高田由香、医療ソーシャルワーカーの役割：チームで行う がん化学療法 安全・安楽な治療と患者支援、本山清美（監修）、日本看護協会出版会、東京、84-88、2008。

6. 研究組織

研究者名	②分担する究項目	③最終卒業校・卒業年次・学位及び専攻科目	④所属機関及び現在の専門（研究実施場所）	⑤所属機関における職名
山口 建	WEB版がんよろず相談システムに関する研究	慶應義塾大学 医学部 昭和49年卒 医学博士 内科学 東北大学 医学部 昭和50年卒 医学博士 医療管理学 慶應義塾大学 医学部 昭和53年卒 医学博士 疫学、公衆衛生学	静岡県立 静岡がんセンター 腫瘍内分泌学 （所属施設同じ） 東北大学 大学院 医学系研究科 （所属施設同じ） 東京女子医科大学 医学部 衛生学公衆衛生学 （Ⅱ）教室 （所属施設同じ）	総長
濃沼 信夫	cost of cancer に関する研究			教授
山口 直人	WEB版がんよろず相談システムで得られる情報の疫学的解析に関する研究			主任教授

澤田 茂樹	術後がん患者の心理的、経済的および社会的負担に関する研究	岡山大学 医学部 平成2年卒 医学博士 呼吸器外科 千葉大学 医学部 昭和50年卒 医学博士 呼吸器外科学 大阪大学大学院 医学研究科 昭和57年	独立行政法人 国立病院機構 四国がんセンター 呼吸器外科 (所属施設同じ) 国保直営総合病院 君津中央病院	医師
柴 光年	進行期悪性腫瘍患者の在宅医療支援に関する調査研究	医学博士 呼吸器外科学 大阪大学大学院 医学研究科 昭和57年	呼吸器外科 (所属施設同じ) 地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪府立急性期・総合医療センター 内科 (所属施設同じ) 富山県立中央病院	副院長
谷尾 吉郎	合併症を有する肺がん患者のQOL	医学博士 内科学 金沢大学 医学部 平成元年卒 医学博士 外科学 東北大学 医学部 昭和53年卒 医学博士 消化器外科	外科 (所属施設同じ) 岩手県立中央病院	主任部長
加治 正英	胃がん患者の術前・術後のQOL向上に関する研究	日本医科大学院 昭和47年卒 医学博士 外科学 京都大学 医学部 昭和54年卒 医学博士 外科学	公立阿伎留医療センター 診療部緩和ケア科 (所属施設同じ) 市立岸和田市民病院	部長
望月 泉	消化器癌術後のQOLを向上させることを目的とした支援療法等のあり方に関する研究	新潟大学 医学部 昭和53年卒 医学博士 外科学 岡山大学大学院 医学専門課程 平成5年卒 医学博士 外科学	外科・消化器外科 (所属施設同じ)	副院長兼 消化器外科長
江上 格	WEB版がん情報提供とよろず相談システム開発に関する調査研究			診療部参事
小切 匡史	消化器がん手術後、血液がん造血幹細胞移植後のがん生存者とその家族に対する支援療法等のあり方に関する研究		消化器外科 (所属施設同じ)	副院長兼 外科部長
土屋 嘉昭	消化器がん治療後患者および家族に対する支援に関する調査研究		新潟県立 がんセンター 外科 (所属施設同じ)	部長
田中屋 宏爾	がんハイリスク者のカウンセリングに関する研究		独立行政法人 国立病院機構 岩国医療センター 診療部 外科 (所属施設同じ)	医長

謝花 正信	放射線治療治療を施行する過程でのがん患者の QOL を向上させることを目的とした支援療法等のあり方に関する研究	鳥取大学 医学部 昭和 53 年卒 医学博士 放射線科 長崎大学 医学部 昭和 54 年卒 医学博士 外科学 自治医科大学 医学部 平成 4 年卒 学位なし 浜松医科大学	松江市立病院 診療局 (所属施設同じ) 佐世保市立総合病院	診療部長
原 信介	外来化学療法を受ける患者の QOL を向上させる支援療法のあり方に関する研究	昭和 54 年卒 医学博士 外科学 自治医科大学 医学部 平成 4 年卒 学位なし 浜松医科大学	外科 (所属施設同じ) 静岡県立 静岡がんセンター	管理診療 部長
石田 裕二	こどもおよびその家族を中心とした家族支援に関する研究	平成 4 年卒 学位なし 浜松医科大学	小児科 (所属施設同じ) 静岡県立こども病院	部長
堀越 泰雄	小児がん患者の合併症の早期発見と対処方法についての研究	昭和 59 年卒 学位なし 小児科学 弘前大学 医学部 昭和 45 年卒 医学博士 内科学 金沢大学 医学部 昭和 60 年卒 医学博士 血液腫瘍学 熊本大学	血液管理室 (所属施設同じ) 東京都立駒込病院	室長
佐々木 常雄	がん患者の化学療法中、後における社会的、心理的支援ツールに関する調査研究	昭和 45 年卒 医学博士 内科学 金沢大学 医学部 昭和 60 年卒 医学博士 血液腫瘍学 熊本大学	化学療法科 (所属施設同じ) 独立行政法人 国立病院機構 名古屋医療センター 臨床研究センター 血液・腫瘍研究部 (所属施設同じ) 飯塚病院	院長
永井 宏和	化学療法後の身体的・心理的障害に関する研究	昭和 60 年卒 医学博士 血液腫瘍学 熊本大学	名古屋医療センター 臨床研究センター 血液・腫瘍研究部 (所属施設同じ) 飯塚病院	部長
山本 英彦	WEB 版がんよろず相談で行う「がん治療費概要」検索システムの構築	昭和 53 年卒 医学博士 呼吸器内科(肺癌) 島根医科大学	呼吸器内科 (所属施設同じ) 栃木県立 がんセンター	副院長兼 呼吸器内科部 長
関口 勲	WEB 版がんよろず相談システムを活用した栃木県立がんセンターがん情報、相談支援センターの運営についての研究	昭和 57 年卒 医学博士 婦人科腫瘍 九州大学 医学部 昭和 59 年卒 医学博士 外科学 東北大学大学院医学部 昭和 57 年卒 医学博士 生理学	婦人科 (所属施設同じ) 独立行政法人 国立病院機構 九州がんセンター 乳腺外科 (所属施設同じ) 宮城県立 がんセンター 研究所 がん医療情報・緩和学部 (所属施設同じ)	副部長
大野 真司	乳がん患者と家族の支援ツールに関する調査研究	昭和 59 年卒 医学博士 外科学 東北大学大学院医学部 昭和 57 年卒 医学博士 生理学	九州がんセンター 乳腺外科 (所属施設同じ) 宮城県立 がんセンター 研究所 がん医療情報・緩和学部 (所属施設同じ)	医長
長井 吉清	病名告知の QOL への影響	昭和 57 年卒 医学博士 生理学	がん医療情報・緩和学部 (所属施設同じ)	部長

細川 治	がん患者の代替医療相談に関する研究	金沢大学 医学部 昭和 50 年卒 学位なし 消化器外科学 群馬大学大学院	福井県立病院 健康診断センター (所属施設同じ) 群馬県立 がんセンター	センター長
蓮見 勝	がん外来診療における心のケア・医療相談に関する研究	平成 16 年卒 医学博士 泌尿器科 北海道大学 医学部 昭和 50 年卒 医学博士 緩和医療学 三重県立大学 医学部 昭和 45 年卒 医学博士 胸部外科 防衛医科大学	泌尿器科 (所属施設同じ) 千葉県 がんセンター	部長
渡辺 敏	緩和ケア病棟における、園芸療法・音楽療法・カラージュ療法導入に関する研究	緩和医療学 三重県立大学 医学部 昭和 45 年卒 医学博士 胸部外科 防衛医科大学	緩和医療科 (所属施設同じ) 独立行政法人 国立病院機構 三重中央医療センター	部長
坂井 隆	がん患者の QOL を向上させるための地域連携緩和医療の検討	昭和 56 年卒 学位なし 放射線医学 筑波大学 医学専門学群 平成 4 年卒 医学博士 緩和医療学 佐賀医科大学	(所属施設同じ) 医療法人社団北斗 北斗病院	院長
山下 浩介	がん生存者の QOL 向上に関する研究	昭和 56 年卒 学位なし 放射線医学 筑波大学 医学専門学群 平成 4 年卒 医学博士 緩和医療学 佐賀医科大学	診療部在宅診療科 (所属施設同じ) 静岡県立総合病院	部長
須賀 昭彦	がん患者に対する緩和・支持治療のあり方に関する研究	昭和 60 年卒 医学博士 精神医学 和歌山県立 医科大学 昭和 46 年卒 医学博士 外科学 京都大学医学部 大学院 昭和 62 年卒 医学博士 外科系 千葉大学医学部 昭和 47 年卒 医学博士 医学	緩和医療科 (所属施設同じ) 大阪府立 成人病センター	医長
柏木 雄次郎	地域連携を通じた在宅緩和ケアの支援策に関する調査研究	昭和 60 年卒 医学博士 精神医学 和歌山県立 医科大学 昭和 46 年卒 医学博士 外科学 京都大学医学部 大学院 昭和 62 年卒 医学博士 外科系 千葉大学医学部 昭和 47 年卒 医学博士 医学	脳神経科(脳瘍精神科) (所属施設同じ) 独立行政法人 国立病院機構 大阪南医療センター 外科 (所属施設同じ) 日本赤十字社 和歌山医療センター	部長
田伏 克惇	集学的癌化学療法に対する抗癌剤血中濃度解析支援	昭和 46 年卒 医学博士 外科学 京都大学医学部 大学院 昭和 62 年卒 医学博士 外科系 千葉大学医学部 昭和 47 年卒 医学博士 医学	大阪南医療センター 外科 (所属施設同じ) 日本赤十字社 和歌山医療センター	統括診療部長
金岡 俊雄	泌尿器がん手術後の QOL に影響を及ぼす因子の研究	昭和 62 年卒 医学博士 外科系 千葉大学医学部 昭和 47 年卒 医学博士 医学	第一泌尿器科 (所属施設同じ) 成田赤十字病院	副部長
加藤 誠	小児がんの子供を持つ親への心理的サポートに関する研究	昭和 47 年卒 医学博士 医学	脳神経内科 (所属施設同じ)	病院長

田沼 明	がん患者における機能障害・能力低下およびそれらに対するリハビリテーションの知識の普及に関する研究	慶應義塾大学 医学部 平成 8 年卒 医学博士 リハビリテーション医学 東京大学大学院	静岡県立 静岡がんセンター リハビリテーション科 (所属施設同じ)	部長
服部 洋一	WEB版がんよろず相談の利用状況からみたコンテンツのあり方に関する研究	平成 15 年卒 学術修士 文化人類学・ ソーシャルワーク	静岡県立 静岡がんセンター 研究所 患者・家族支援研究部 (所属施設同じ)	技師
柿川 房子	がん術前後における患者の生活障害と支援モデルに関する研究	立正大学 昭和 56 年卒 文学修士 文学部社会学科 筑波大学大学院 教育研究科	新潟県立看護大学 看護学科 (所属施設同じ)	教授
石川 睦弓	化学療法を受けるがん患者を支援する情報提供ツールのあり方に関する研究	平成 12 年卒 カウンセリング修士 がん看護学 日本女子大学 家政学部	静岡県立 静岡がんセンター 研究所 患者・家族支援研究部 (所属施設同じ)	部長
吉田 隆子	がん患者の QOL 向上のための小児期からの食育のあり方に関する研究	昭和 44 年卒 家政学士 食物栄養学・ 栄養教育学 筑波大学大学院 教育研究科	日本大学 短期大学部 食物栄養学科 (所属施設同じ)	教授
小池 眞規子	がん患者の QOL 向上に関する心理学的研究	平成 3 年卒 教育学修士 臨床心理学 東京大学大学院 医学系研究科	目白大学 人間学部 心理カウンセリング学科 (所属施設同じ)	教授
大野 ゆうこ	QOL に基づくがん患者支援療法等の分類および効果評価に関する研究	昭和 60 年卒 医学博士 医学意思決定 (計量医学) 金沢大学大学院 医学系研究科	大阪大学大学院 医学系研究科 総合ヘルスプロモーション科学講座 (所属施設同じ)	教授
青木 和恵	がん患者のセルフコントロールの確立を目的とした専門ケアの提供に関する研究	平成 15 年卒 保健学修士 保健学専攻 創傷ケア領域 共立女子大学 家政学部	静岡県立 静岡がんセンター 看護部 (所属施設同じ)	部長
稲野 利美	がん患者の QOL 向上のための栄養・食事相談のあり方に関する研究	昭和 61 年卒 学位なし	静岡県立 静岡がんセンター 栄養室 (所属施設同じ)	室長

高田 由香	がん患者・家族のQOL向上を目的とした総合相談や情報提供のあり方に関する研究	日本女子大学 文学部 昭和62年卒 学士 社会福祉 Mills 大学院	静岡県立 静岡がんセンター 疾病管理センター よろず相談 (所属施設同じ) 静岡県立 静岡がんセンター 研究所 看護技術開発研究部 (所属施設同じ) 大分県立病院	主幹
大曲 睦恵	こどものケアに関する相談支援のあり方の研究	平成15年卒 修士 チャイルド・ライフ 九州大学 医学部 昭和53年卒 医学博士 外科	大分県立病院	技師
田代 英哉	WEB版がんよろず相談システムの活用に関する研究	昭和53年卒 医学博士 外科	外科 (所属施設同じ)	副院長兼 所長兼 部長